

巻 頭 言

東北大学大学院理学研究科数学専攻 小谷元子

「アウシュビッツ以後、詩など書くことは野蛮」(T.アドルノ)

東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被災された方々の生活が一日も早く改善されることを願ってやみません。

また、震災直後から、国内外の数学関係機関、数学研究者の皆様より、東北大学理学研究科・数学専攻の被災に対するお見舞いの言葉、そして数々のご支援のお申し出を頂きました。震災時の同専攻長として、この場を借りて、皆様の厚い思いやりに深く感謝申し上げます。

3月、そして4月、何人かの数学者から、いてもたってもいられない、何か我々にできるだろうかというメッセージが届いた。日本数学会理事会が数学教育・リテラシーの重要性を訴える「声明」を発表したのも、そのような声に突き動かされての事であった。

2011年3月11日14:46, M9.0 震度7の地震が東日本を襲った。津波は記録的な高さまで駆け上り、東北地方沿岸部に住む人々の生活を根こそぎにした。東北大学のある仙台市中心部は津波からは遠く離れており、キャンパス内での負傷者ゼロであったが、自宅等学外で亡くなられた学生3名は痛ましい喪失である。学内の建物、設備の損害は770億円(東北大学の年間予算が約1390億円)と見積もられた。教育環境の復帰を第一に、そして研究環境の回復へと、その道のりは長い。経済的、もしくは精神的なダメージを受けた学生が勉学や研究を続けられるよう、東北大学は基金を設け、また、学生の精神面のケアと教員へのFDを行っている。学生ボランティアグループの活動支援も行っているが、ボランティアに行った学生が逆に参ってしまうケースも多い。地震直後に多くの留学生が、本国からの帰国命令に従って、仙台を離れたが、新学期(本年は通常より1ヶ月遅れの5月9日開始)にはほぼすべての正規学生が戻ってきて学業・研究に従事している。

東北大学には大学院理学研究科と大学院情報科学研究科に数学専攻がある。理学研究科では地震直後に安否確認および備蓄していた水/食料の配布を行い、その後、学生および職員の安全確保のための退避命令が研究科長よりだされた。当時の仙台は、まるで夜汽車のように絶えず揺れが続き、ライフラインは断たれ、再度大きな地震が来る可能

性も指摘されていたためである。「学生の安全確保を第一に」が合い言葉であった。福島原発の再臨界や、火山噴火の可能性も囁かれるなか、全く怖くなかったという嘘になる。しかし、理学研究科には地震、海洋、気象、原子核・放射線の専門家がおり、それぞれの専門家による現状分析を聞いていると心が落ち着いた。知識は恐怖を克服する。数学専攻では、小川専攻長の指揮の下、復興 WG を立ち上げ不安な状況のなかで安全を確認しながらも復旧作業を開始した。情報伝達のための緊急ホームページを開設し、また日本数学会にも臨時掲示版を設置いただき、情報の収集と発信で大変にお世話になった。経済基盤を失った学生のための「数学教育研究復興事業」には、全国から多大なご支援をいただいた。この場を借りてお礼を申し上げます。

理学研究科に於いても、情報科学研究科に於いても、数学専攻の設備面での主要な被害は図書室である。蔵書のほとんどすべてが床に散乱し、固定していた書棚がゆがみ、その光景に呆然としていた私は、小川先生の「学生が帰ってくるまでに、勉学のできる環境に戻るのが教員の務めでしょう」という言葉に叱咤激励された。幸いに理学研究科・数学専攻の資料室は回復の目処がたったが、情報科学研究科・数学専攻の被害状況はより大きいようだ。このようなときに、二つの研究科に別れていることはもどかしい。震災から半年後の9月11日、東北大学理学部は百周年行事を粛々と執り行った。まだ、被災地では涙も乾かないのに、我々は何を祝うのだろうかという理学部長の式辞のとおり、ちょっと足を延ばせば、そこに荒廃がただただ広がっていることを意識しながらの後ろめたい式典であった。そして2012年、日々はまだ日常には戻らず、東北大学は薄い氷の上で妙に明るい舞踏を踊っている。野蛮としかいい様のない狂騒のなかで立ち止まり、真に人間的な状態を取り戻すことができるのだろうか。

こういう時だからこそ、数学のような基礎科学がしっかりしなくてはと思う。E.サイードの「意志的な楽観主義」と言う言葉を日々つぶやいている。2012年が、日本にとって良い年でありますよう。